



安部公房『榎本武揚』論：蘇る共和国

長澤，拓哉

(Citation)

國文論叢, 60:63-75

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100483036>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483036>



安部公房『榎本武揚』論

——蘇る共和国——

長澤 拓哉

はじめに

長篇小説『榎本武揚』は、一九六四年一月から翌六五年三月にかけて「中央公論」に連載された後、同年中央公論社より刊行された、安部公房にとって唯一の歴史を題材とする作品であるという点で異彩を放つ作品である。榎本武揚の存在を心の拠り所とすることで自身の戦後の変節を正当化しようとする元憲兵・福地伸六、榎本を裏切り者として糾弾し「五人組結成の顛末」を記した新撰組元隊士・浅井十三郎、そして小説家と思しき「私」を通じて、本作は「忠誠」の在り方を描き出している。

本作は、安部自身の共産党離党の経緯を踏まえて「転向文学」として読まれることが多い。例えば武井昭夫が「現代の転向問題を扱った、新しい型の転向文学」と呼び、本作について批判的な評価を下したほか、田村栄は「戦後の転向論を文学作品として具体化した一つの顕著な例証」が本作であり「自己の転向＝マルクス主義からの脱落を合理化するために意義的に書かれた作品である」と断言した^②。後年の作品解釈においても専らこの「転向」と

いう枠組みは維持されている。山田博光が本作で問題とされているのは「時代への忠誠」の意味であり、変節（転向）は許すことのできない行為かという疑問である^③と述べたほか、岡庭昇は「全体として試みられているのは、転向の思想化である。ごく日常的な日常内での転向である。いいかえるなら大義や理念を、生活の実体によって測り、検証しようとする意図にはかならない」と論じた。また、河野基樹は「政治原理主義を無力化するために、転向にまつわる従来の思想・思索を『パラダイムシフト』^④することを目的に創作された^⑤」と本作を評価している。このように先行論では、安部が本作において「転向」問題をその主題に据えたという見通しが概ね共有されている。

六〇年代後半の安部の活動において、その政治意識を窺わせる出来事の一つに、文化大革命への反応がある。一九六七年、安部は石川淳・川端康成・三島由紀夫と共に、文化大革命に反対する共同声明を発表し、「学問」「芸術」を政治利用することに対する強い反発を示した。四作家の座談会「われわれはなぜ声明を出したか——芸術は政治の道具か？」^⑥を見てみよう。ここで石川淳が

「紅衛兵」の運動を否定したわけではないと述べたことに賛同し、安部は「あれはやっぱり勝つための運動じゃなく、負けることによって勝つといった運動で、いずれ敗北は見えすいていると思うんです。その破壊というものが、逆に近代国家をつくるプロセスとして、やむを得ないものであったということもよくわかる」と述べている。⁶ 安部が評価するこうした「運動」のあり方は、榎本が八百長戦争において試みたことと重なっている。この件は花田清輝との決別を決定的なものにするなど、六〇年代以降の安部の思想的転換を示す出来事の一つであるが、このような動向も本作に安部の「転向」を見ることを根拠づけていると言えるだろう。

一方、安部自身は後年行われた対談の中で本作について「抛りどころを捨てようとした当時の新知識の悲劇を書きたかったのですが、それがもつぱら転向小説とかなんとかにとられちゃって、べつに転向やなんか問題にしたわけではなかったのです」⁷と述べるなど、繰り返し「転向小説」としての読み方を否定している。ここで注目すべきは、戯曲版『榎本武揚』の存在である。本作は一九六七年、福田恆存率いる劇団雲によって上演された。安部は戯曲版について、「単なる脚色ではな」く「あらためて、戯曲の形を借りた続編」であると述べている。⁸ この戯曲作品は、たんに小説版の筋立てや主題をなぞるばかりでなく、先述した「転向」批判の問題など、同時代における小説版に関しての批評言説を作品内に取り込んでいるのである。

ここで課題となるのが、作中で榎本武揚という実在の人物がどのように語られているのかを明かにすることである。両版の『榎本武揚』が同時代の思想的潮流とどのような相互関係にあったの

か、また小説版と戯曲版の繋がりを考察するにおいても、作品構造の分析は避けて通れない。だが、両版についての従来の解釈では、概ね思想内容が比較検討されるにとどまってきた。

小説版では「五人組結成の顛末」を中心に、榎本に関する福地伸六の語り、そして「私」の語りが展開される。戯曲版においても、作品冒頭に昭和四十二年という時間が設定された上で三人の批評家のほかに榎本自身が同時代にタイムスリップして登場し、四者が問答を繰り返し広げる。両作が共有するのは、榎本という人物を中心に置き、彼の動向を外部から相対化する言説を配するという構造である。

本稿では小説・戯曲版『榎本武揚』それぞれの作品構造の分析を行い、両作において示される思想内容と作品形式との関連を明かにすることを試みる。その上で榎本を巡る言説と、作中に於いて示される榎本像との比較を行うことで、安部がこの人物をどのような存在として捉えていたのか、またどのような意図をもつて題材としたのかを検討したい。

一、小説版における思想の形成

小説版『榎本武揚』は、「私」が「五年ほどまえ、ある放送局の依頼で北海道旅行をした」時の回想で始まる。そこで「私」は旅館の店主で元憲兵の福地伸六から榎本武揚の共和国伝説を聞かされるが、その時点では特に関心を持つことはなかった。事態が進展するのはそれから一年後、すなわち「私」の現在から四年前のことである。福地から届けられた一通の手紙が、「私にこの文章を書かせるような結果」をもたらしたのである。

福地から届けられたのは「手紙というよりもむしろ小包といったほうがよさそうな、ずっしりとした大型の封筒」であり、中には「右肩をしっかりこよりでとじた、枚数にして数百ページもありそうな（正確には二百九十ページだった）原稿用紙の束」と「細字用のペンでぎっしり書きこまれた、八枚ばかりの便箋」が入っていた。この「原稿用紙の束」こそが、本作の大部分を構成する《五人組結成の顛末》（以下「顛末記」）である。

「顛末記」は新撰組隊士である浅井十三郎が榎本武揚の変節を糾弾するために記したとされる資料である。その特徴としては、筆者浅井の手によって複数の資料が参照及び引用されているという点が挙げられる。例えば浅井が榎本の裏切りを糾弾しようとする一節として、次のような記述が見られる。

さよう、榎本の奸計、面従腹背がいかりのものであったかは、わずかに次の一事だけをもつてしても、容易に察していただけるはずである。たとえば、次の文章に目をとおしていただきたい。苦心のすえ手に入れた、一昨年の新聞記事である。

《内外新報第三十号 慶応四年五月四日》——後四月十五日出上方よりの来状。近藤勇去る八日より三条大橋の下河原において梟首せらる。右葉札の写。

元新選組 近藤勇事

此もの兇悪の罪迹あまた有之上、此度甲州勝沼、武州流山両所において官軍に敵対せし段、大逆たるによって如此令禁

首ものなり。

ここでは榎本の裏切りの事実を裏付けるための資料として、実在の新聞である「内外新法第三十号」の記事が引用されている。「顛末記」のなかには、この他にも「江湖新聞」や「横浜新報もしほ草」といった新聞記事をはじめとする多くの資料の引用が確認されるのである。

「顛末記」を読み進める「私」は、その過程で「浅井十三郎と名乗る、この手記の筆者についてだが、はたして、その筆者一人で書き上げたものかどうか、すこぶる疑わしい」と書き手についての疑いを露わにする。さらには「そもそも、そんな新発見の資料なるものが、はたして本当に実在していたのかどうか」、「あの福地氏になら、この程度の創作くらい、おそらく千円札の偽造ほども、努力を必要とはしなかったのではあるまいか」と資料自体が福地の手になる偽書なのではないかという疑いの眼を向けている。

なかでも注目されるのは、手元にある「顛末記」が、「福地氏の筆跡と文体で書かれたもの」であったということに「私」が言及している点であろう。福地にとつて「漢文あり、仮名まじり文あり、楷書あり、行書あり」であった「顛末記」の読解は困難であり、そのため「中国で漢文の教師をしていたことがあるという、農協の配達伝票整理係の老人をたのみ、毎晩2時間ずつ、口語体になおして読んでもらいながら書きつづつ」たという。

このように不透明な成立過程を有する「顛末記」は、福地の主張を織り交ぜながら「書かれる」ことによって再編成される。浅

井が書いたという「顛末記」における浅井や榎本の思想は、「福地の言葉」で書き直されて語られることによって彼の主張を体現する存在となる。そこに実体としての浅井や榎本は存在せず、彼らは福地が思考を形成していく過程で内部化されているのである。

そのことを端的に表しているのが、「顛末記」に挿入される福地の注釈である。たとえば浅井らが榎本を毒殺するために牢に入る場面では、カッコ書きで「ここに、福沢諭吉が、榎本の妹嫁、江連堯則にあてた手紙の一節を引用し、《顛末記》筆者の記述の裏付けに資することとする『福地記』という注釈を加えた上で、資料の挿入が行われている。みづから「十三郎が新聞に関心を深めた」ということは、とりもなおさず、事実の確認にそれだけ意味を認めたということでもあり、おそらくこうした態度が反映しての、手記の体裁なのでありましょう」と示唆するように、福地は自身の主張を補強するための手段として資料を参照し、またそれに則って記述を進めているのである。

「顛末記」を読み進める「私」は、そこに示された「榎本に対する憎悪と否定」が「福地氏から、榎本の歴史の評価として聞かされていたものほどにも、徹底してはいない」ことを指摘し、本書が「榎本の裏切りの意味を、必死になって問いつづけているうちに、いつか榎本の存在をとりこして、裏切りという行為のもつ意味そのものに、直接対決させられてしまった」ところにその原因を求めている。すなわち「私」の解釈によれば、「顛末記」は、「榎本の糾弾」という目的を超えて「裏切り」という事象そのものを問うものへと変質している。

その変質には、本書が福地の手で書き換えられたことが与して

いると考えられる。すなわち本書の主題が「裏切り」、そして「忠誠」の在り方を問うものへと転換したのはそこに福地の思想が仮託されたからに他ならない。一章末尾に挿入された「私」のもとに届けられた便箋の最後のページにおいて、福地は以下のように述べている。

しかるに、昨日を裏切らねば、今日に忠誠たりえず、今日に忠誠たらんとすれば、昨日を裏切らねばならぬというのは、いったい、いかなる理屈によるもののでありましょうか。さっぱり分らんのであります。時代や、制度を、自分勝手に選べるほどの者でないかぎり、ひいた籤は、ぜんぶ外れときめられておるとも言うのでありましょうか。しかしながら、生きておる以上は、籤をひかぬわけにはまいらぬのであります。役所だろうと、会社だろうと、制度と申すものがあり、制度と申すものがあるかぎり、かならず忠誠が求められておるのであります。それを破れば、てきめん、誠首はさけられぬのであります。これが矛盾でなくて、なにが矛盾であります。このところの理屈が、私には、さっぱりと飲み込みないのであります。でありますから、どうしても過去の非を認めると言われるのなら、では、忠誠そのものを罪悪であるとみなすような制度をば、制定していただきたい、と、こゝ私は申し上げるしかないのであります。

元憲兵の過去を持つ福地は、反軍思想の文書を所持していた義弟を摘発するなど、戦時体制下のもとで忠誠を全うした人物であっ

た。しかしその忠誠心は、終戦によって、裁かれるべき罪へと反転する。戦後の新たな忠誠を信じることができず、憲兵時代の忠誠を信じ続ける自身のような「時代から落伍した人間」にとつて、榎本は「変節漢」などではなく救世主となる存在である。自身と厚岸共和国の伝説に登場する囚人たちとを重ね合わせた福地は、だからこそ自身の忠誠心の擁護者として榎本武揚という存在を追い求めたのであろう。

本作の成立と近い時代の言説に目を向ければ、「忠誠」の問題を論じたものに丸山真男の「忠誠と反逆」がある。丸山は、幕末維新期の社会的・政治的過程を「忠誠と反逆の人格内部での緊張と葛藤」という点でも、わが国未曾有の規模と高度とに達した時代と捉え、「伝統的生活関係の動揺と激変によって、自我がこれまで同一化していた集団ないしは価値への帰属感が失われるとき、そこには当然痛切な疎外意識が発生する。この疎外意識がきっかけとなって、反逆が、または既成の忠誠対象の転移が、行われる」と論じ、集団の基盤が揺らぐ転形期における忠誠の在り方を問うていた。しかし丸山の議論は、福地が拘泥した忠誠概念と重なるところも大きい。

福地の意識は「忠誠」という概念そのものを問うことに向けられており、ここに榎本を巡る歴史や言説の分析と解釈を通した、思想形成の過程を見ることができる。したがって、注釈による事実確認もあくまで資料として提示するために必要な手続きであつて眼目はそこにはない。「顛末記」は単に福地が自身の思想を語る上での土壌として置かれているのに過ぎないのである。

二、「私」の編集行為

「顛末記」は戊辰戦争における会津藩城の場面で一度中断されている。三章冒頭部でそのことについての見解が述べられた後、福地は「研究をもとにした」「幾項目かの自問自答」によつて「つづく手記へのつなぎ」とすることを試みている。この「自問自答」は注釈の枠を超え、「顛末記」の本文と地続きのものとして置かれている。

はじめ榎本さんは、私の耳許に口をよせ、おだやかな調子で、こう申された。「なにもくよくよ、肩身のせいまい思いをすることはない。時代が変わつたのは、なにもおまえのせいじゃないんだよ」ちよつぱり酒臭いような、親身な声で、私は全身がぬくもつてくるような思いをしたものでした。ところが、今度は、その同じ口の下からこう仰言る。「だが世間には、なかなかの頑固者もおつてな、自分と時代とは一心同体だなどと抜かして、どんな餌にもとんと無関心だ。こういう聞き分けの悪い手合いも、時代に不都合さえないけりや、けつこうもの用に立つてくれるのだが、なにぶん時代の方が、ぼっくり先立つてしまつたのだから始末がわるい。主人が死んでも、主人のくれる餌しか食わぬ犬の忠義は、かえつてはた迷惑さ。そこでどうするかと言へば、こつちも連中の先頭に立つて、敵だ、敵だ、ものども立ち合え、とわめきたててやる。ただし、その先にあるのは、海に面した崖つぶちだ。それでも、忠誠心というやつは、馬の目隠しみたいなものだから、連中

わき目もふらずにつつ走り、どんぶり、どんぶり、自分勝手に片付いてしまつてくれるのさ。連中もそれで、忠誠をまつとう出来たのだから、満足だろうし、おかげで世間も、無事息災というわけだな」

福地の「自問自答」は、『問の一』として土方歳三が開陽艦に乗り組んだ心境の変化を、『問の二』では協和政府思想に同調し投票に参加した事実から土方の忠誠の変質を問い、いずれも福地自身の忠誠の問題へと収束する。ここでは、福地による榎本の内部化が顕著となり、彼の内面で直接的に榎本と対話するに至っている。そこで榎本が発した言葉は、これまで抱いてきた忠誠の擁護者としての姿からはかけ離れたものである。しかし、福地は自身の中の榎本像を捨て去ることはできない。続く「顛末記」の中で「無節操こそ、もっとも道理にかなった生き方」であるという榎本の考えが明らかにされてもおお、福地は「いぜん榎本さんの論拠の隙を、見つけ出せずに」いる。福地の「忠誠」概念は、「顛末記」を読む以前と以後で何ら変わりはない。結果、福地の試みは、ただ「闇のなかでの、ひとり相撲」に終わってしまうのである。

福地のこの行き詰まりは、榎本を内部化したことに求められるだろう。「私」の視点はそれを観察する外部に置かれている。福地が「もしも、あなたに、いくばくかの見解がありますならば、ねがわくは、ご教示ねがいたい。賛成、不賛成にかかわらず、なか一と言、私のために、おめぐみいだきたいのであります」と述べているように、「顛末記」は「私」の読むという行為を前提とするのである。

日高昭二が「やがて複数の筆者を次々に想定する過程で、今度は「私」までもが、『顛末記』の解体と再編に及んでいく」と述べるように、福地の記述を読み進めるうちに「私」もまた書き手の位置へと導かれていく。以下は福地からの手紙の内容に関しての「私」の記述である。

もっとも、その全文をそっくりここに書きうつす必要はないだろう。よほど追いつめられた状態で書いたものと見えて、ある部分はかなり文脈が乱れ、ある部分は重複が目立ち、またべつの部分には意味不明の箇所さえ見受けられた。それに、内容によっては肝心の《五人組結成の顛末》のほうの自身を知ってからでなければ、じゅうぶんにはその意図をくみとれないような所もある。とりあえず、まわり舞台を廻転させる、心棒の役割をした一節だけをそのまま紹介し、あとはなんとか私なりに手を加えたうえで、それぞれに相応しい場所を見つけて出してやるとしよう。

ここで「私」は「その全文を書きうつす必要はない」とし、福地の手紙を自身が編集していることを明示する。編集者としての「私」は、福地と「顛末記」の筆者の議論を読み、それらを抄写しながら相対化している。福地と「顛末記」の関係について、「新資料の出現という、事件に関するかぎり、彼は明らかに被害者」であると判定する「私」は、一方で「時代を相手の訴訟となると、はたしてどちらが被害者で、どちらが加害者か、めつたな加減を除くくらいでは、処理しきれるものではない」ために、「それ以上の

点については、判断をさしひかえ」と述べる。「私」はこうして、自身の判断を下すことなく資料の確認に徹し、「顛末記」を第三者として受容することによって、福地が形成する榎本像、及びそれを取り巻く言説や思想からは一定の距離を取っている。

「私」と同じく現代の視点から忠誠を巡る言説を捉える存在として物語の最後に登場するのが福地の甥である。彼は戦中に福地によって摘発された「義弟」の息子であるが、彼にとって福地の行いは忠誠の在り方とは無関係に糾弾されるべき罪であり「仮に、榎本武揚が、最初に伯父が考えていたような、忠誠そのものの守護者であつたとしたところで」彼に「伯父を許せるわけがない」。福地の榎本への執着を目の当たりにしながら「この世に政治が存在するかぎり、忠誠は社会の必要悪かもしれませんが、しかし出来れば、そんなものとは、かわり合いを持たずにすませたいものですな」と冷やかに答える彼は、忠誠を巡る闘争それ自体を無意味なものとして否定する。

山田博光は「明治維新と昭和二十年の敗戦という、二つの歴史的転形期を重ね合わせ、したがって小説の構造も歴史小説でありながら現代小説でもあるという、二重構造を意識的に採用している」と指摘しているが、それら二つの時代の転形期を象徴する思想は、「私」という現代の眼を持つ存在によって統御されている。したがって、本作の比重は明らかに現代の側に置かれていと言えらる。 「私」と福地の甥はともに福地より後の世代、すなわち現代の視点に立つ存在である。本作の結末は、福地の内部に生じた「変節」あるいは「転向」という忠誠の所在を巡って生じる問題を追及する行為それ自体の可能性を露わにするのである。

三、戯曲版における現代との接続

安部の自作解説によれば、『榎本武揚』の戯曲版は、小説版の発表時に寄せられた批評を伴中に取り込んでいる。すなわち「批評家の一部が、こうまで登場人物化してくれたことを、黙って見のがしておく手もあるまいと思ひ、これらの批評家諸君に、せめて地獄（舞台）で榎本武揚と直接対面してもらうことにした」というのである。冒頭のプロローグでは、それぞれ異なった思想を持つA・B・C三者の「演出家」が登場し、彼らが現代に登場した榎本武揚と対峙する。

三人の「演出家」A・B・Cはそれぞれ進行・榎本擁護・榎本批判の役割を担う。榎本について、Aが「けっきょくその本質は、ご都合主義の変節漢にすぎなかったんじゃないか、というのが、まあ後世の評判なんです」と述べれば、「そこまで言っちゃ、言いきだ。一部には、ちゃんと、理解者もいるんですから」とBが反論し、それに対しCが「体制順応主義者」であると評するなど、三者は榎本の評価を巡って論争を繰り広げる。「あなたのことを、うっかりはめたりすると、たちまち左右両翼から袋叩きだ」と榎本に語りかけるBは、箱館戦争については「主戦派を海の向うの僻地に隔離して、内乱の早期終結をはかるのが目的だった」と解釈する。それに対し、Cは「ナシヨナリストの常習的な手口」とであると、榎本の行動を批判する。このように、三者の榎本に対する評価はそれぞれの政治的立場を背景として発せられている。

初演に際しては、芥川比呂志が一人でA・B・Cの三役を演じた。黒川欣映は、「序幕の「現代」を現わす、A、B、Cの三人の

人物を同時に演じて、戯曲そのものとしての部分の不必要さを、逆に魅力的な導入部に転じてしまった」と述べている。ここでは、一人三役を演じた芥川の演技力が評価される一方、導入部はあくまでも「不必要」な部分だと見られている。

だが、本作があえて三つの批評的立場を作中に導入したことが持つ意味については、より注目するべきであろう。前述の通り、A・B・Cの三者はそれぞれ異なる思想を持って榎本と討論を交わすが、舞台上ではそれらは全て「現代」を象徴する一人の人物を通して語られる。この場面で榎本は、個々の思想ではなく、それらの諸相の総体としての「現代」と対峙させられている。その後牢内に戻ってから、あくまで「夢」として受け取りながらも「後世、われわれの評判、あまりかんばしくないようだ」と永井に語るように、榎本は「現代」への認識をこのプロローグによって獲得することになるのである。

戯曲版において一貫して描かれているのは、榎本の教育的な態度である。小説版では「顛末記」において榎本の箱館戦争から投獄に至るまで様子までが叙事詩的に描かれており、投獄後の牢内での様子は仔細には書かれていない。対して戯曲版では、牢内での出来事のみ焦点が当てられ、榎本が囚人たちに外国語や軍事技術についての授業や講義を行う様子が描かれている。注目されるのは、プロローグにおける以下の榎本と「演出家」たちの対話である。

榎本（気がかりらしく）すると、ここも、牢屋なのかね？

B 劇場ですよ。

C 牢屋も、劇場も、似たようなもんさ！

A 芝居小屋です。

榎本 そりゃまた、意外だ！ちと見物してみたいね……昔、ぼくがバリーで芝居を見て、つくづくと感じたんだが、芝居くらい、その時代をよく現わしているものは……

「現代」＝昭和四十二年に呼び出された榎本は、「ここも、牢屋なのかね？」と質問する。これに対し、Bは「劇場ですよ」と答え、それに合せてCが「牢屋も、劇場も、似たようなもんさ」と答える。ここでは、観客にとつての「現代」の劇場と、榎本にとつての「現在」の辰の口の牢屋という空間とが重ねられ、それによつて劇場内の観客と牢内の囚人もまた重ねられる。長尾一雄は「榎本や浅井のドラマとして成就させる背景をなすところの、囚人たちの集団のドラマは語られて」おらず「囚人たちの群像に実体」が無いと指摘しているが、本作では囚人たちの存在が抽象されることによつて、彼らに向けられる榎本の言葉が同時に「現代」の観客に対しても向けられるよう仕掛けられている。ここで榎本が語る思想は、同時代の問題系を照射するよう仕組まれているのである。

このように、小説版と戯曲版はいずれも、榎本を「現代」に蘇らせることによつて、作中にある種の枠構造を設定している。小説版においては登場人物である福地の記述を通して現代の「私」は榎本と対峙しているが、そこに榎本としての実体はなくあくまでも福地という人物に思想として内部化された存在に過ぎなかった。そのようにして語られる「忠誠」は、結末で自ら語るように

「過去の亡者」の「怨嗟の叫び」に過ぎず、武井昭夫によって「現代との緊張関係がこの作者には決定的に欠落しているのではないか」と批判されるに至る。

対して、戯曲版では、榎本その人を直接現代に呼び出しており、ここに武井のような批判に応える安部の意図を見てとることができらう。それは、いわば小説版における読み手である「私」の位置に観客を置くことによって、問題意識を共有させようとする仕掛けでもあった。小説版において見られる手記の形式は、六〇年代において安部が多用した「書く」、「読む」行為の関係性それ自体を問いつつ方法であったが、この方法は、舞台と観客の関係性を操作する戯曲版の方法と通底するものであると言えるだろう。

それでは、そのような方法を通して現代に蘇らされた榎本武揚とは安部にとってどのような存在であったのか。次節では榎本に関する言説と作中における榎本の描写を比較しながら、安部が彼をどのような人物として創造していったのかを検討したい。

四、榎本武揚の創造

両版の『榎本武揚』において安部が提示した榎本武揚像と深く関連しているのは、『榎本武揚 明治日本の隠れたる礎石』（中央公論社、1960）以来榎本の再評価を行った、技術史家・加茂儀一の言説であろう。加茂は「日本人としては最高の技術者としてあるいは知識人としての仕事を果たし、捨身になって日本の産業の発展のことしか考えていなかった」人物であると榎本を評し、小説版『榎本武揚』においても取り上げられている福沢諭吉の「瘦

我慢の説」をはじめとする榎本批判を「単なる外面的な人間の出世にのみこだわってその人の心の中にひそんでいた悩みを無視したものであると非難した」¹⁶。

安部の榎本像は、加茂のこうした内在的理解を共有していると考えられる。例えば、加茂は榎本が駄洒落句を好んだことを取り上げ「本来茶目つ気の多い人間で、威張ることを知らなかった人間であり、他人の面倒をよくみ、情愛の細やかな人間であった」と述べている。このような榎本像は、小説版において福地の祖母が抱いた「身分に似合わず、気さくで、愛想のいい男だった」という印象と重なっている。祖母に伝えられたこのエピソードは福地に影響し、以降「顛末記」によって榎本の裏切りが自明なものとなってもなお揺らぐことのない榎本像の根幹を成している。

また、軍事技術、国際法、化学、鉱物学、電信技術等に精通した榎本の先進性については、加茂がつとに指摘するところである。こうしたイメージは戯曲版において、牢内が「当時の日本における一番水準の高い」「最高学府」である「榎本学校」となるところに明確に反映されている。

安部は榎本について「共和国という思想をもつということとは抛りどころを捨てることで、たいへんなことだったと思うのです。アジアで最初の共和国でしょう」と述べ、榎本が幕末維新期すでに共和国思想を抱いていたことを評価している。安部が榎本に見出していたのは、知識人としての先見性と国際性であった。安部が榎本を共和国思想の先駆者として評価した所以である。安部は榎本を「いま生きててもいいようなモダンなところのある人間だった」と評し、その理由として「あの時代に、オモチャみたい

なものではあるが共和国をこしらえた」と述べるなど、榎本の功績において最も評価すべき点として「箱館共和国」を作り上げたことを挙げ、忠誠をめぐる問題よりも、彼の共和国思想が創作上の最大の主題であったことを示唆している。榎本が共和国主義者であったか否かについては、見解が分かれるところである。加茂儀一は、榎本が投票により総裁を決したことについて、「自らが勝手に総裁を名乗るよりもみんなの責任において選ばせることが、全体の統率にとって都合のよいことを彼が知っていたから」であり、「政治体制としての共和国の樹立」を考えていたかどうかについては疑問を呈している²¹。安部はこのような見解を踏まえつつ、共和国の先駆者としての新たな榎本像の創造を試みているのである。

ただし、安部の言葉とは裏腹に、小説版は明らかに忠誠、転向の問題に焦点が当てられていると言つてよい。それはこの作品が、小説家の「私」ではなく、福地という人物の忠誠という問題への拘泥を中心に置いたことの帰結であろう。共和国の根幹を成す入札制度についても、「顛末記」では大きく取り上げられてはいない。しかし、福地は「ともかく投票というのは、かなり刺激的な事件であったに相違ありません。私自身、かつて憲兵時代のことを思い出してみますと、投票という言葉聞いただけでも、なにやら忌まわしい不純なものを感じていた記憶があります」と述べ、封建制に反するところみであったことを示唆している。その上で、現在はそのような考えは一切持っていない事を強調し、その理由を「時代が私の忠誠を必要としなくなったための変化（悪しざまに申せば変節）」に見ている。福地にとって、榎本がとった入札と

いう方法は「明らかに、忠誠心そのものに対する、挑戦」なのである。ここで入札は福地自身の「忠誠」概念を巡る問題系の中に回収されてしまっている。

ここで注目すべきが一九六〇年に発表された花田清輝の「慷慨談の流行」であろう。ここで花田は福沢の「瘦我慢の説」、久保栄の『五稜郭血書』における榎本の扱いを取上げ「作者が自分を棚にあげて、あまりにも轉向者としての榎本武揚の弾効に全力をあげすぎているため、どうもわたしは納得するわけにはいかない」と指摘する。その上で、福沢の榎本批判の態度を「つねに政治的責任をとることを回避してきた人物が、みずからの怯懦を恥じるどころか、正しかったにせよ、まちがっていたにせよ、終始一貫、政治的責任をとってきた勝海舟や榎本武揚のような人物の行動を、道徳的責任の名において糾弾することは、本末でんとうもはなはだしい」と批判した²²。花田が福沢の批判の根拠に「政治的責任」を置いていることからわかるように、榎本を巡る言説の中心にはやはりその「転向」の是非があった。従来の研究においても指摘されているように、小説版の執筆に当り、花田の「慷慨談の流行」が安部に与えた影響は否定しえない。小説版「榎本武揚」はその成立過程において既に「転向」を中心とする戦後の政治的文脈への位置付けから逃れ得るものではなかったのである。

戯曲版では牢内での榎本に焦点が当てられ、そこで囚人たちに教育を施す様子が子細に描かれている。これは各人に主体的思考を確立させるための過程である。戯曲版のクライマックスでは、蝦夷地開拓における総裁を決定するために行われた入札が描かれる。このとき榎本は「実際に、指揮能力のある人間、統率力のある

る人間」を「自分の意志で」決めることを強調する。従来忠誠が打ち碎かれた今、求められるのはその代替としての新たな忠誠を待ち望むことではなく、自らが主体的にその節の在り方を選択することである。戯曲版において榎本が示す共和国思想は、このような理念に支えられている。しかし、直前に八百長戦争が糾弾されたことに動揺した囚人たちが、総裁として選んだのは浅井だった。戯曲版は榎本の落胆をもって幕を閉じることとなる。

（急に、きびしく）なるほど、そうか……そういうわけか……どうも、せんだつてから、夢見が悪いと思ったが……（一同を見まわし）どうやら、何もかもが、無駄だったらしいな。封建の時代が終って、新しい時代が来ているんだってことを、あれほど話してやったのに、なんにも分っちゃいなかったんだな。君たちは、命令してくれる殿様がいないりゃ、自分の始末も出来ないような、腰抜けなのか。だんだん、暗くなってくる。夜明けかと思っていたら、この薄明りは、どうやら夕暮れの光だったらしい。無駄だったよ。勝手に墓場から、殿様の幽霊をひっぱり出してくるがいいさ。馬鹿者だよ、君たちは。せっかくの入札も、君たちにかかっちゃ、猫に小判だ。

榎本は共和思想をを繰り返して説き、その思想が囚人の間に浸透してきたのだと考えていた。ところが、選ばれたのはむしろ旧態依然とした封建制・君主制の残存を象徴する浅井だった。未だ根強く封建制が残存していること、そして共和制の不可能性を痛

感した榎本は、囚人らを強く批判する言葉を残すのである。

おわりに

榎本の共和国が実現する様子が作中で描かれることはない。永井玄蕃が「もしも厚岸共和国に成功すりゃ、大したもんだ」とその計画を称賛するのに対し、榎本は「成功なんか、するはずがないでしょう」とあつさりとその成功を否定するのである。続けて「最初っから失敗を見越してけしかけたのか」という永井の問いに、共和国の「種をまくため」であると答える榎本の姿には、共和国体制の必要性を説きながら同時代においてそれが実現し得ないことに対する嘆きが見られる。

このように、共和国が未完の企てとして成功し得ないものとして提示されていることは、六〇年代の「現代」において未だ封建制が残存することを示唆するものであると言えるだろう。

小説版に寄せられた評について、安部は「忠誠問題で、とたんにアレルギー性の反響がまき起こり、転向小説だ」と決めつけられちゃった。戯曲ではその批判にも答えるように配慮した」と述べ、本作についてはあくまでも「人間社会における個と全体の問題をそこにとらえてみたかったわけで、砂の女以来、近く発表予定の書きおろし長篇小説『燃えつきた地図』²³まで、ぼくが一貫して追求してきたテーマ」なのだと言っている。²⁴

安部は『榎本武揚』の執筆に際し「膨大な資料を使っている」ことをもって自負している。だが、複数の資料を参照しながら榎本像を形成していく過程で、自身の思想の仮託先として榎本という存在を内部化してしまったのではないか。この構図は、小説版

における福地の姿に重ねられよう。小説版の結末部、福地の甥が語る「この世に政治が存在するかぎり、忠誠は社会の必要悪かもしれないませんが、しかし出来れば、そんなものとは、かわり合いを持たずにすませたいものです」という言葉は福地を通してそのまま安部自身に向けられたものとして読むことができる。

それが主題ではないにせよ、小説版『榎本武揚』の内部には確かに忠誠、そして転向を巡る問題が内包されていた。忠誠という概念は安部にとって、封建制と強い結びつきを持つがゆえに、自身の共同体思想とは相容れないものであった。したがって、ここに見られるのは自身の「転向擁護」であるよりも、むしろ転向の問題を文学のそれとして捉える政治主義的発想をそれ自体に対する決別の意志であると言えるだろう。戯曲版上演と同年の一九六七年に連名で発表した「文化大革命に関する声明」において「あらゆる『文学報国』的思想、またはこれと異形同質なるいわゆる『政治と文学』理論、すなわち、学問芸術を終局的には政治権力の具とするが如き思考方法に一致して反対する⁽²⁵⁾」と記載しているように、安部は明確に政治と文学の結びつきを否定しているのである。「失踪三部作」に見られるように、六〇年代において安部は自身の関心を都市空間へと移し、以降「箱男」や「密会」などさらに都市の内部へとその視点を降ろしていく。『榎本武揚』をそうした安部の主題の変遷の中に位置付けるとき、そこに政治という巨視的な視点を退け、より微視的な視点を獲得しようとする安部の志向を見ることができないだろうか。

※本文の引用はすべて、小説版に関しては初刊本『榎本武揚』（中央公論社、1965・7）を底本とする『安部公房全集18』（新潮社、1999・3）に、戯曲版に関しては初刊本『戯曲 友達・榎本武揚』（河出書房新社、1967・11）を底本とする『安部公房全集21』（新潮社、1999・6）に拠った。

注

- (1) 武井昭夫「危機意識の欠落について」（『新日本文学』新日本文学会、1966年2月1日↓『文芸時評大系 昭和編3 7巻』ゆまに書房、2009・10）
- (2) 田村栄「歴史小説にあらわれた転向の問題——『榎本武揚』と『沈黙』について」（『文化評論』第64巻、文化評論社、1967・2）
- (3) 山田博光「安部公房『榎本武揚』（維新前夜の思想と文学）——近代文学に描かれた維新」（『国文学解釈と鑑賞』第36巻、至文堂、1971・12）
- (4) 岡庭昇「『榎本武揚』——戦後への清算と訣別」（『現代の眼』第20巻、現代評論社、1979・10）
- (5) 河野基樹「戊辰函館五稜郭の文学——佐幕・転向・プロレタリアアリズムをめぐる物語」（『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』埼玉学園大学、2006・12）
- (6) 石川淳・川端康成・三島由紀夫・安部公房「われわれはなぜ声明を出したか——芸術は政治の道具か？」（『中央公論』中央公論社、1967・5↓『安部公房全集21』新潮社、1999・6）
- (7) 安部公房「私の文学を語る」（『三田文学』三田文学会、1968・3↓『安部公房全集22』新潮社、1999・7）
- (8) 安部公房「『榎本武揚』について」（『中央公論』中央公論社、1

- 967・10↓『安部公房全集21』新潮社、1999・6)
- (9) 丸山真男「忠誠と反逆」(『近代日本思想史講座 第六卷「自我と環境」』筑摩書房、1960)
- (10) 日高昭二「獄舎の夢—安部公房『榎本武揚』論」(『国文学研究』113、早稲田大学国文学会、1994・6)
- (11) 山田博光「安部公房『榎本武揚』(維新前夜の思想と文学)—近代文学に描かれた維新」(『国文学解釈と鑑賞』第36巻、至文堂、1971・12)
- (12) 安部公房「『榎本武揚』について」(『中央公論』1967・10↓『安部公房全集21』新潮社、1999・6)
- (13) 黒川欣映「軽やかなエッセイ風喜劇—劇団雲公演『榎本武揚』評」(『テアトロ』1967・11)
- (14) 長尾一雄「歴史の空虚さ・活人画・牢—雲『榎本武揚』」(『新劇』白水社、1967・11)
- (15) 武井昭夫「危機意識の欠落について」(『新日本文学』新日本文学会、1966年2月1日↓『文芸時評大系 昭和編3 7巻』ゆまに書房、2009・10)
- (16) 加茂儀一「榎本武揚小伝」(『榎本武揚資料』新人物往来社、1969・8)
- (17) 同16
- (18) 同16
- (19) 安部公房「私の文学を語る」(『三田文学』三田文学会、19968・3↓『安部公房全集22』新潮社、1999・7)
- (20) 安部公房「この人・インタビュー 安部公房」(『随筆サンケイ』サンケイ新聞社、1968・2↓『安部公房全集21』新潮社、1999・6)
- (21) 同16
- (22) 花田清輝「慷慨談の流行」(『中央公論』1960・7)
- (23) 安部公房「戯曲が認められて」(『東京新聞』1967・9↓『安部公房全集21』新潮社、1999・6)
- (24) 安部公房・磯田光一「日常生活の発見」(『新刊ニュース』1967・11↓『安部公房全集21』新潮社、1999・6)
- (25) 石川淳・川端康成・三島由紀夫・安部公房「文化大革命に関する声明」(『東京新聞』1967・3・1↓『安部公房全集21』新潮社、1999・6)
- (ながさわ たくや／神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程)